

令和元年6月7日現在

機関番号：64401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16768

研究課題名(和文) 笑い話に注目した日本語ナラティブの「型」と「技」の地域比較

研究課題名(英文) Regional Comparison of "form" and "technique" in Japanese narrative: With special reference on funny story telling

研究代表者

金田 純平 (KANEDA, Jumpei)

国立民族学博物館・人類基礎理論研究部・外来研究員

研究者番号：10511975

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：ナラティブ(体験談)は文化や地域、社会階級によって違うことはすでに示されている。本研究では、談話のなかでもナラティブのスタイル・進め方の地域間の違いについて、特に差があると思われる東北地方と関西地方についてそれらの特徴を明らかにすることを目的とする。実際に談話を収録して調査を行ったところ、以下のような特徴が得られた。「型」について見ると、(1)出来事を語る部分で、個々の遭遇した事象に対する反応が関西に比べ東北では少ない(2)擬音語・擬声語の使用が東北では少ない(3)関西では直接引用が見られ、話者によっては演技が伴うことがある。これはむしろ「技」に該当する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、日本における談話の地域差について明らかにすることである。音韻や単語、表現の違いはこれまでの方言研究でも明らかにされていることであるが、談話の進め方・スタイルについての言及を行っているものは管見のところ少ない。これを明らかにすることは日本語の実態についてより核心に迫るものである。また、体験談を面白く語ることは、「すべらない話」のように一つの芸能コンテンツにもなっている。また、面白さが評価される文化圏も存在することから、その中で面白く体験談を語るることについて、その特徴や手法について明らかにすることは、どうすることによって面白く表現できるかということを知る手がかりにもなる。

研究成果の概要(英文)：It is already shown that styles of narratives differ among cultures, regions and social classes. This study aims to explain differences in style and strategy of telling narratives between regions, mainly focused on Tohoku and Kansai regions, where the differences are likely to be significant.

By recording and analyzing discourses in Tohoku and Kansai regions, the characteristics of differences are found as follows: (1) appearances of specifying reactions or sentiment to each event in discourse are low in Tohoku when telling narrative events, (2) use of imitatives or onomatopoeia is low in Tohoku compared to Kansai region; these two characteristics are in regard to "form" of narratives; and (3) direct quotes are found in Kansai, in which some speakers use acting. (3) is rather qualified as "technique" than "form".

研究分野：言語学・コミュニケーション

キーワード：談話 ナラティブ 地域間比較

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究の背景

言語について、民族や文化、地域ごとに変わるものは言語そのもの(音韻・語彙・文法)だけではない。言語の運用についてもそれぞれにおいて違いが見られることが明らかになっている。Kaplan(1966)は、議論の進め方が文化圏ごとに異なることを示している。また、Tannen(1984)は、同じアメリカ英語を話す西海岸のギリシャ系移民と、東海岸に住むユダヤ人との間で家族での日常会話の進め方が違うことを明らかにしている。このように、言語が異なれば、あるいは同じ言語の中でもそれを使用するコミュニティ・社会集団が異なれば、話し方に違いが現れることが確認されている。

日本においても、場面に応じた発話の形式について、地域的な違いが見られる。小林・澤村(2014)によると、例えば、家人が亡くなった家に訪問した時に不祝儀を言う場合、近畿地方ではこの不祝儀の言い方が各地でほぼ同じ形式を取っている。これに対して、東北地方では、各地で言い方が定まっておらず、それぞれで違う言い方をしている。また、他者を威嚇する表現についても、近畿地方では「お前、なめとったらあかんで」といった形式に各地でほぼ一致するが、東北地方ではこれが定まらず、各地でそれぞれ違った言い方をしている。このことについて考えると近畿地方では、ある程度ものの言い方について共通した「型」があると考えられる。また、談話の進め方についても同様の「型」があるのではないかと考えられる。

(2) ナラティブの流れ

ナラティブ(語り・体験談)を語る際にはその出現順序に構造が見られる。Labov(1972)は、この構造を構成する要素として、Abstract, Orientation, Complicating Action, Result or Resolution, Evaluation, Coda の6つを挙げている。Abstractで全体の概要を述べて始め、Orientationでは背景状況や登場人物について説明し、Complicating Actionで語りの中心となる出来事のシークエンスを述べ、Result or Resolutionで結末について示し、それがなぜ語るに値する出来事だったのかをEvaluationで説明し、話の締めくくりとしてCodaで結ぶという流れである。これを日本語のナラティブに適用したのがMaynard(1989)である。Maynardはこれらを、導入(Prefacing)、背景説明(Setting)、出来事語り(Narrative Event)、結末(Resolution)、評価(Evaluation)、結句(Concluding Remark)として再定義した(訳語は筆者による)。主な役割はLabovの構造の要素の順序にほぼ対応するが、日本語のナラティブの特徴に合わせる形でその名称を変更したと考えられる。体験談の語りには基本的にこの構成が使用され、それは多くの日本語ナラティブに該当するものと考えられる。

(3) 談話の構造の違い

上記のことから考えると、文化や民族、地域が変われば談話のスタイルが変わること、また、それらの中で決まった談話スタイルを持つことが予想される。また、ナラティブの構成についても文化や地域ごとに違いがあったとしても、それは十分に考えられることである。特に、不祝儀や威嚇の表現に共通性が見られる近畿地方では、ナラティブの進め方にも一定の特徴があると考えてもおかしくはないだろう。また、他の地域でナラティブの進め方に違いが見られれば、それが近畿地方でのナラティブの特徴であると言える。

2. 研究の目的

上記で見たように、談話のスタイルは地域や文化ごとに異なること、また、決まった言い方が成立している地域があることが挙げられる。そこから、日本の各地域において、特に近畿地方(関西地方)とその差が大きいと考えられる東北地方を主に対象として、ナラティブについてその語りの構造に違いがあるかどうかを明らかにする。また、その際に行われる談話上の行動(言語・非言語ともに)にどのようなものがあるのかも明らかにする。

3. 研究の方法

関西地方および東北地方でナラティブを含む談話データを収録するために、それぞれ複数のインフォーマントに雑談してもらった。その様子をボイスレコーダーで録音し、インフォーマントが許可した場合はビデオカメラによる撮影も同時に行った。また、当初は笑い話を中心に収録する計画であったが、インフォーマントにそれを依頼すると難色を示したこと、またその指示により不必要なプレッシャーを与えてしまうことから、特に笑い話でなくても、談話の中に体験談が見られればそれをナラティブとして扱い、分析の対象とすることにした。

収録した音声は、文字書き起こしを行い、主にナラティブにおける談話構造の分析と、それに付随する言語表現の分析の対象とした。また、音声データについては中で見られる韻律等のパラ言語情報について分析するものとし、許可された場合のビデオ映像については非言語的な特徴の分析に用いた。

関西地方の話者によるナラティブについては、一部「わたしのちょっと面白い話コンテスト」公式サイト(<http://www.speech-data.jp/chotto/>)の投稿作品の映像・音声を使用した。

また、談話の収録は、関西地方と東北地方以外に西日本での特徴を同時に捉えたいと考え、補助的な調査として、広島でも行うことにした。

なお、インフォーマントへの謝礼については、金銭の支払いではなく、物品(主に菓子など、

個人出費)の提供という形で行った。

4. 研究成果

(1) 近畿地方でのナラティブの構造

談話の基本的な構造については、Maynard(1989)の示すナラティブの構成要素と同じ順で出現していた。導入(Prefacing)については十分に行わずに背景説明(Setting)に入る話者も少なくなかったが、背景説明を行わずに出来事語り(Narrative Event)に入るケースは見られなかった。談話で語りを行う場合には、まずその状況を説明しなければ相手と情報や場面を共有できないと考えられる。また、評価(Evaluation)や結句(Concluding Remark)もほとんどの語りで現れていた。基本的な部分として Maynard のナラティブの構成要素モデルは成立していると考えられる。

次に関西地方の話者による出来事語りの中で特徴的に見られた接続表現(接続詞・接続助詞、およびそれに類する表現)について調査したところ、談話を展開させるものとして、「～たら」「それなら」等(以下これらをタラ系と呼ぶ)の出現が顕著であった。このうちタラ系は、加藤(2003)によるとコントロール不能な意外・予想外な事態を後件として導く確定条件の接続表現であり、談話では「劇的な場面」に使われることが多いとされる。これは、出来事語りの内部において、遭遇した出来事を導く場合に現れる。また、その遭遇した出来事後に、それに対する感想や反応についての言及が多く見られた。

その例を以下に示す。下線部が遭遇した出来事に対する反応である。

警察の人が来はったので わたしの家で何かあったのかなと思って ずーと 熱い視線を感じながら見てたら パッと見たら 家の前によく犯人の人が 捕まったときに乗せはる護送車みたいな 窓に網目のある車が止まって て で わたしも何が起きたかわからなくてー なんでこんなとこに、こんな車が止まっているのかなーて思ってた

つまり、出来事語りの中で描かれる一つの事象について、それをそこに至るプロセス、それと遭遇、それに対する反応という3つの部分に細分化され、これらが繰り返すという内部構造があることがわかった。この構造を模式化したものが図1である。

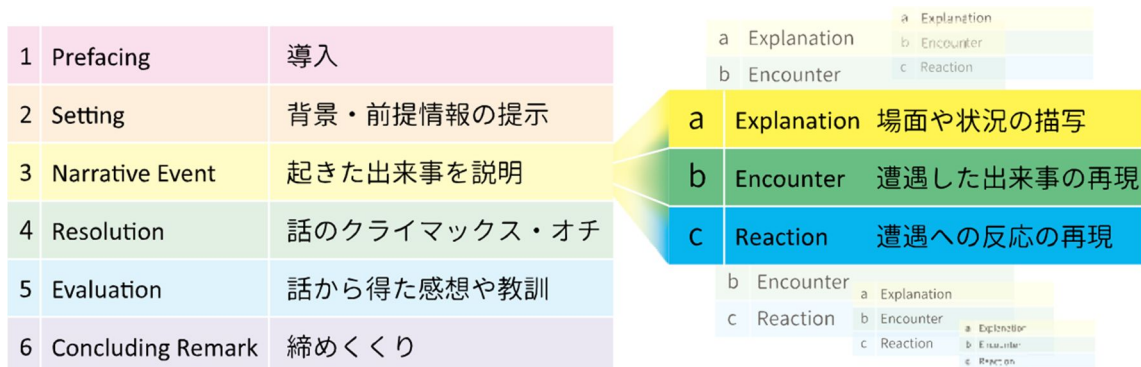


図1 近畿地方の話者のナラティブの構造

この内部構造は、一つ一つの事象に対して、その内部で出来事語り(Narrative Event)、結末(Resolution)、評価(Evaluation)が見られるというように考えられ、全体としての構造の内部に、それと似たような構成が繰り返されるというように見ることができる。

また、この構造は、プロの関西芸人による語りの中でも観察することができた。このように考えると関西地方でのナラティブの構成としては出来事語り(Narrative Event)の内部にプロセスの説明・出来事との遭遇・それに対する反応が繰り返されるという内部構造があるということが示唆された。

東北地方の話者では、出来事語りの中でタラ系の表現を用いることは少なくなかったが、その個々の出来事に対する感想や反応に関する言及はほとんど見られなかった。もちろん、これは笑い話を意図して話してもらったわけではないという理由もあるかもしれないが、反応を言わないということには、その特徴として考えられそうである。

(2) ナラティブでの擬音語・擬態語の使用

関西方言話者、とくに大阪方言話者は話す時に擬音語や擬態語を多く使うと言われている(尾上 1999)。これは収録したデータについて観察してみると、全ての話者が擬音語・擬態語を使うわけではなかった。これらを使うかどうかは話者によって違いがあるようで、多用する話者とまったく使わない話者に分かれた。これらが現れるのは出来事語り(Narrative Event)の中のプロセスの説明の場合がほとんどであった。次の例は擬音語・擬態語の使用の多かったものから採取したものである。

まるでまてまてしまて、ちょーどやったんで、そう、そう、そう、そう
 それであのー、父が、それを恥ずかしいからー、でよーと思てー、ぱーっと流したんですよー

ぱあーって、そしたらー、流れなくて、その、ぼおんっと入ってしまったからー
東北地方の話者では擬音語・擬態語を使うという例は非常にまれであり、ナラティブであってもその他の発話であっても、その出現が非常に少なかった。

(3) 話す時の身振り（ジェスチャ）の使用

関西地方の話者がナラティブを語る時に一部の話者ではジェスチャを交えて話すということが見られた。ジェスチャの出現を語り全体を 100%とした場合にどの時間位置に出現するかを測定したところ、語り始めの部分では少なく、終末に向かうについて増加していることがわかった。これは、話の盛り上がりに合わせて増えていくと見られる。

しかし、このジェスチャは関西地方の話者からはほとんど見る事ができなかった。笑い話ではないこと、話者が男性である（関西地方での話者の多くは女性であった）という部分も大きいかもしれないが、収録上で確認できたもの（1件であるが）は非常に少なかった。

(4) 直接引用をする場合の演技

関西地方の話者の一部には、ナラティブの中で登場人物が語る内容をそのまま引用するような形で話す直接引用が見られた。この直接引用を行う上でその中の一部の話者は、その人物になりきるかのような演技を行うことが見られた。また、その人物へのなりきり型であるが、完全にその人物になりきるというよりは、その人物のキャラクタに応じた声色（声の高さおよび声質）や形式（年寄りの真似であれば、通常は使わない終助詞として役割語的な「のう」を使う）を用いて行われるということがわかった。人物というよりは人物像を模したかたちで直接引用が行われる。この様子はごく一部の話者に限られていたため、(1)のような発話の「型」であるというよりは、面白おかしく話そうとするための「技」ではないかと考えられる。

このような直接引用も、東北地方の話者のナラティブでは現れなかった。直接引用とも言える箇所はなかったわけではないが、そこには演技らしいものは見られなかった。

< 引用文献 >

Kaplan, Robert B. "Cultural thought patterns in intercultural education" In *Language Learning*, 16, 1966, pp. 1-20.

Labov, William. *Language in the Inner City: Studies in the Black English Vernacular*. 1972, University of Pennsylvania Press.

Maynard, Senko. *Japanese Conversation: Self-Contextualization through Structure and Interactional Management*. 1989, Ablex Publishing.

Tannen, D. *Conversational style: Analyzing talk among friends*. 1984, Ablex Publishing.

尾上圭介『大阪ことば学』1999, 創元社.

加藤陽子「日本語母語話者の体験談の語りについて 談話に現れる事実的な‘タラ’ ‘ソシタラ’の機能と使用動機」『世界の日本語教育』13, pp.57-74, 2003, 国際交流基金.

小林隆・澤村美幸『ものの言いかた西東』2014, 岩波書店.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 4 件)

1. 金田 純平「直接引用とキャラ」定延利之(編)『「キャラ」概念の広がりと深まりに向けて』査読無, 三省堂, 2018, 180-196.

2. 金田 純平・波多野 博顕・乙武 香里「笑い話における言語・非言語行動の特徴 関西の一般人と関西芸人の比較から」定延利之(編)『限界芸術「面白い話」による音声言語・オラリティの研究』, 査読無, ひつじ書房, 2018, 130-147.

3. 定延 利之・岩本 和子・楯岡 求美・林 良子・金田 純平・Goran Gaage・三井 久美子・鎌田 修「「プロフィシエンシーと語りの面白さ」第2回研究集会」『日本語プロフィシエンシー研究』5, 査読無, 2017, 69-120.

4. 金田 純平 「マルチメディアからみた日本語とキャラ」『日本語文法学会第16回大会発表予稿集』査読無, 2015, 49-53.

〔学会発表〕(計 2 件)

1. 金田 純平「笑い話における言語・非言語行動の特徴 関西芸人と一般の女性の比較から」, 研究集会「プロフィシエンシーと語りの面白さ」第2回, 2016年10月01日, 於 三宮コンベンションセンター.

2. 金田 純平「マルチメディアからみた日本語とキャラ」日本語文法学会第16回大会, 2015年11月15日, 於 学習院女子大学.

〔その他〕
ホームページ等
「日本語ナラティブの「型」と「技」の地域比較」
<http://kobe-l.net/kaken/>

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。